

留学現場から

シドニー留学体験記

古屋 真央

(ふるや まお)
人文学部 4年

私は、大学2年の後期から1年間オーストラリアのシドニー工科大学に留学しました。シドニー工科大学では、Australian Language and Culture コースにて、オーストラリアの文化や環境、英語について学びました。授業はすべて英語で行われましたが、初めは聞き取れなかった先生の英語も徐々に理解できるようになりました。また、英語でのレポートやプレゼンテーション、グループワークを通して他国の学生と交流し、英語を話す力が付きました。大学ではサークル活動や寮生活を通して友人を作り、大学外では接客のアルバイトやボランティア活動に取り組みました。

留学を通して私が学んだことは、挑戦することの楽しさと人の温かさです。知らない土地で生活するのは誰でも怖いと思います。私自身も、留学する前やシドニーに着いた時は緊張と不安でいっぱいでした。英語力の低さや他の留学生と比べた時の自分の未熟さを日々感じていました。しかし、自分の弱さに向き合い乗り越えることで、前より強い自分になれたと思います。様々な人や価値観に出会い、人と比べずに自分に自信を持つことの大切さや、英語が話せなくてもそのままの自分を受け入れてくれる友人の存在に気づくこともできました。留学に少しでも興味のある方はぜひ失敗を恐れず挑戦してみてください。楽しいことばかりではなく辛いこともあるかもしれませんが、今しかできない貴重な経験ができるはずです！



広州と門司港

朱 瑩

(シュ エイ)
人文科学研究科修士課程 2年

2022年9月、私は22年間生活し続けた故郷——中国広東省広州市を離れ、山口にやってきて一人異国で留

学生生活を始めた。誕生日も9月にあるため、新しい自分になろうと、希望と新生の期待が高まっていた。

その喜びは早くも挫折を迎えた。広州と違ったところが多すぎてまずは慣れることである。その中で一番不便を感じたのは、山口に地下鉄がないことである。自転車を手配したが、自転車でいける距離にも限界があった。また当時は大学院に進学する為の勉強も迫ってきたため、結局山口に来た最初の一年間は、私はほぼ山口市を出たことはなかった。勉強が疲れたら、遠いところの山を眺めながら、ここに来る前に先生に「山口に中心地のようなところはありますか」と聞き、そして先生の「何もないね、山しか…」と返した言葉が頭の中に響き渡った。

大学院に受かった後、暫く息抜きができるようになり、バイト先でも日本人の友達ができ、遊びに行こうと車で連れていってくれる熱心な女の子である。おかげで、山口では防府天満宮、宇部の常盤公園、萩の南古萩町、長門の元乃隅神社、下関の海響館など、または北九州まで回って日本の自然、歴史建築、現代芸術を堪能していた。東京や京都、大阪などの定番の観光地にも行ったことはあるが、山口や北九州には独自のどこかさがあって愛着が湧いた。

殊に、関門海峡を渡って北九州の門司港を観光していた時は、エキゾチックなレトロ建築も海も「ここは日本ではなくて私は海の向こうにある広州に戻っているのだ」と、タイムスリップしたような感覚があった。広州にも「沙面島(さめんとう)」という観光スポットがあるが、門司港と同じように異国情緒が溢れているところなのである。要は広州も中国の重要な港湾都市であり、近代において中国だけでなく、日本をもヨーロッパ諸国が進出していった歴史的由緒が共通しているのではないかと思った。他国で故郷を幻視するホームシックもあったため、とりわけ門司港で当たった海風が実に私の心を動かした。日本に留学してきたこそ、昔見慣れた景色が蘇ってきた瞬間がこんなにも感動的になったであろう。そして、留学の意味は勉強して自分を高めることにだけでなく、風土と人情との出会いそのものにもあると改めて感じた。



広州の沙面公園